

<研究資料>

北海道におけるトップスポーツチームの合宿地選定要因

石澤伸弘¹⁾, 横山茜理²⁾, 関 朋昭³⁾

A study on the Selection Factors of "Sports Training Camp" on the Top Sports Teams in Hokkaido

Nobuhiro Ishizawa¹⁾, Akari Yokoyama²⁾ and Tomoaki Seki³⁾

Abstract

In Hokkaido have been carried out sports training camp of about 2,000 every year, also visited many top sports teams. The purpose of this study was to clarify the selection factors of the top sports teams that have done a sports training camp in Hokkaido. In this study, interviews were carried out two women's basketball teams and a women's softball team, a men's rugby team coaches and the managers to subject. Data obtained by interview, the visualization was conducted by "Fish Bone Diagram" which was devised by Ishikawa(1956).As a result, "facility", "support", "meal", "climate", and "name recognition", were five factors of the extraction, the factors for being selected as sports training camp has been shown.

《キーワード》スポーツ合宿, トップチーム, 選定要因, 北海道

《keywords》Sports Training Camp, Top Sports Teams, Selection Factors, Hokkaido

1) 北海道教育大学札幌校 〒002-8502 北海道札幌市北区あいの里五条三丁目1-5

Hokkaido University of Education

2) 北翔大学 〒069-8511 北海道江別市文京台23

Hokusho University

3) 名寄市立大学 〒096-8641 北海道名寄市西四条北八丁目1

Nayoro City University

1. 緒言

北海道における集客交流事業の代表的なものとしては「観光」、「コンベンション」、そして「スポーツ合宿」が挙げられる。その中でも「スポーツ合宿」は、「景観」や「著名な施設」などの観光資源に恵まれていない道内の自治体において、冷涼な気象条件や、疲労回復やリハビリ機能を併せ持つ温泉などの天然資源、または既存のハコモロや、関連人材などを有効活用出来るユニークな施策でもあり、道内自治体の半数近くが実施している。北海道環境生活局のスポーツグループでは、道内で「スポーツ合宿」を行っている市町村を対象に毎年、「北海道スポーツ合宿実態調査」を実施しており、それによると、道内で実施されているスポーツ合宿は2千件台で推移しており、市町村合併の影響等により大幅に減少したものと見られる平成17年度以降、ゆるやかな増加傾向を示し、実施件数は横這い状態であるが、参加実人数は減少傾向にあり、それらは道外チームの実施件数と参加人数の減少が原因と報告されている(北海道スポーツ合宿実態調査2016)。減少理由について同グループは、「長期の景気低迷」や「東日本大震災」などを挙げている。しかし、丹埜ら(2009)によると、「『合宿産業』は一見非常にニッチな市場で、客単価が低いうえに季節変動の大きく、収益性の低いビジネスと思われがちであるが、実際は、景気の変動にあまり左右されない一定の市場規模がある。しかし、一般的に合宿事業があまり注目されていないため新規参入が少なく、それ故、蓄積されている先行研究も少ない」と指摘しており、景気変動の影響の有無については見解の相違が見られ、それらを明らかにすることがこれからの研究課題と言えよう。また田邊(2010)は、「合宿産業」の特徴として観光消費型産業のメリットにプラスして、「地域アイデンティティの醸成」や「他地域との交流促進効果」、そして「人材育成効果」、「施設・都市インフラ整備による経済効果や振興効果」などが期待できると述べており、経済効果のみならず、地域の誇りや結束を強めるという非経済的な効果も期待出来ることを示唆している。

スポーツ合宿を行う側の先行研究としては、押見ら(2012)は高校や大学のスポーツチームのスポーツ合宿を行う意思決定者の特性や、意思決定方法及びそのプロセスを探っており、「欲求(Desire)」→「つながり(Association)」→「行動(Action)」→「再来訪(Revisit)」からなる「DAAR」モデルを構築している。しかしながら、プロスポーツやアマチュアトップチームにおける同様の研究はまだ行われておらず、その分野でのデータの蓄積が求められるところである。また、「つながり(Association)」の観点では、筆者らが実施した、道内におけるスポーツ合宿の現状調査(2014)において、スポーツ合宿を実施するにあたっては自治

体が大きな役割を果たすことが明らかとなったが、押見らの研究では「旅行代理店」や「知り合い」のみで、自治体との関わり合いについてはほとんど触れられていなかった。この点を明らかにすることも求められると思われる。

2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催も間近に迫り、北海道内においても「なんとしても数多くの事前合宿の誘致を！」が合い言葉となりつつある。しかし、そのためには自治体としてどのような点をクリアすればいいのかを示す必要があろう。東京圏のみならず、その他の地域へのオリパラ波及効果と呼び込む意味でも、自治体の目線でスポーツ合宿を誘致するための要因を明らかにする意義は大きいものと考えられる。

それを踏まえて本研究では、北海道外に本拠地を置き、道内で合宿を行っているトップスポーツチームにおける合宿地の選定要因を明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

2.1 調査対象

本研究の調査対象は、それぞれの種目において、「実業団リーグ」や「トップリーグ」に所属し、北海道内で合宿を実施している道外トップスポーツチーム(以下、トップチーム)において、合宿地選定に關与するスタッフとした。なお、その内訳を表1に示す。

2.2 調査方法

調査方法は前述したスタッフへの直接面談法によるインタビュー調査を採用し、各クラブの拠点施設やクラブ運営会社の関連施設などにて実施した。調査時期は平成26年9月から平成27年1月までで、1回あたりのインタビュー時間は60～90分であった。

インタビュー調査を実施するにあり、平成26年6月に筆者の所属大学の研究倫理委員会からの承認を得た。また、実際の調査にあたっては、調査協力を依頼する際に調査趣旨と調査内容を事前に告知することで、回答に関わる事柄の整理も依頼した。インタビュー実施の際には、「研究目的」、「研究方法・期間」、「研究協力者としての選定理由」、「予想される利益や危険性または不便」、「研究への参加・撤回について」、「守秘や個人情報、データの管理に関すること」、「研究結果の公表について」などを再度説明し、了承いただいた後に、「研究同意書」を取り交わすことによりラ・ポールの形成を図った。そして、先方の了承を得た上でICレコーダーにて録音を行った。インタビュー自体は複数の調査員による半構造インタビュー法で行われ、必要以上に内容が反復するような質問は避けることを留意した。

表1 インタビュー調査対象

	種目／(本拠地)	所属リーグ※	情報提供者	合宿地	実施年数
1	女子バスケットボール (東海)	バスケットボール女子日本リーグ機構	A氏(アシスタントコーチ, 女性)	オホーツク	2年目
2	同上 (関東)	同上	B氏(ヘッドコーチ, 男性) C氏(アシスタントコーチ, 女性)	十勝	3年目
3	男子ラグビー (関西)	ジャパンラグビートップリーグ	D氏(主務, 男性) E氏(副務, 男性)	オホーツク	15年目
4	女子ソフトボール (関東)	日本女子ソフトボール機構1部	F氏(監督, 女性)	後志	10年目

※所属リーグはインタビュー当時

なお調査内容は「これまでの合宿実施場所」, 「道内合宿を行うようになった経緯」, 「具体的な選定要因」, 「道内合宿を行ってみたいの感想」, 「道内合宿地への要望」などであった。

2.3 分析方法

分析方法として、データの客観性と信頼性を高めるため、録音したインタビュー内容を忠実に書き起こした逐語録を作成した。次に、筆者と共同研究者の3名で逐語録を熟読し、それぞれ文脈分析を行った。文脈分析の方法については、まず、それぞれが、合宿地として北海道を選定した要因と思われる言説を中心に抽出し、それらの関連を検討した。また同時に、文脈の中で頻出して使用された文節やキーワードも抽出し、要因の重みづけを行う際の資料となるようにした。上記の作業が終了した後は、3名の研究者で協議を行い、それぞれの解釈結果の類似点や相違点を同意に至るまで吟味・検討し、その結果を記述的にまとめた。そしてその内容を基に、合宿地として選定された要因を「特性要因図」を用いて視覚化した。特性要因図とは1956年に石川馨が考案した、特性と要因の関係を系統的に線で結んで樹状に表した図をいい、「魚の骨」にも似ていることから「fishbone diagram」とも呼ばれる。

特性要因図は、まず、水平の矢印線(背骨)を描き、その右側に特性(問題点)を書く。次に背骨に向けて斜めに矢印線を描き、特性に大きな影響を与える要因を書く(大骨)。次に、大骨に向けて矢印線を描き、同様に大骨に対して影響を及ぼす要因を書く(中骨)。必要がある場合にはさらに同様の検討を続け、細分化して小骨以下を作成する。最後に、作成した特性要因図における重要度を検討し、要因の重みづけも行う。というものである。

本研究においては、「研究結果をいかに解りやすく自治体にフィードバックするか?」といった点に注力した。そのためには「質的データから明らかとなった

事象をどのようにして視覚化するか?」といったことが大きな課題となった。そこで筆者たちは、取り上げた問題点に対して、その原因をメンバー同志で提起し視覚的にまとめ、重要と思われる要因については的を絞って効果的に探求していくことが可能な特性要因図化する手法を選択した。

3. 結果及び考察

3.1 特性要因図

道内で合宿を行っているトップチームにヒアリングを行い、合宿地の選定に関する要因の抽出を試みた。その結果、「施設」、「サポート」、「気候」、「食事」、「知名度」といった5つの要因が抽出でき、それを基に特性要因図を作成した(図1)。なお、文脈の中で頻出して使用された文節や、キーワードの出現頻度などを元にそれぞれの要因の重みづけを考慮した結果、①から④の順で重要度が高いことが明らかとなった。

3.2 「①施設」について

トップチームの合宿地選定要因として最も重要視されたのは「施設」であった。また、「施設」の構成要因(中骨)として「主活動場所」、「補助活動場所」、「ウエイト」、「プール」の4つが挙げられた(図2)。以下にそれら4つの要因を抽出する根拠となった象徴的な言説を示す。

3.2.1 「主活動場所」

「主活動場所」とは、その種目がメインで使用する体育館やグラウンドを指すが、そこを使用する上では、「占有使用」、「融通」、「アクセス」の3つの要因が重要であり、それらを小骨として示した。

・「占有使用」

F氏：私たちの合宿中に高校生の大会をやってるんですね。大会っていってもオープン戦みたいな形で…

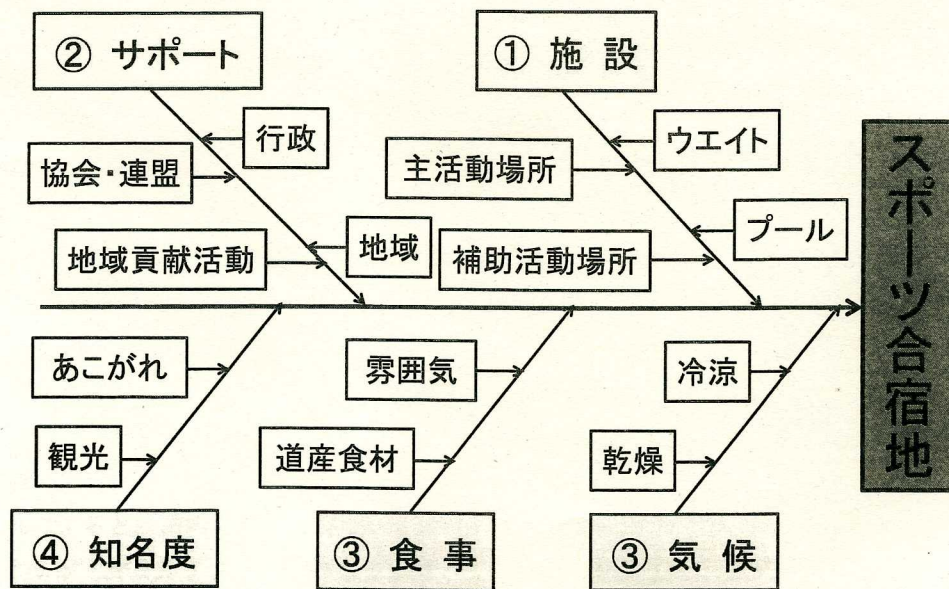


図1 「スポーツ合宿地」選定のための特性要因図

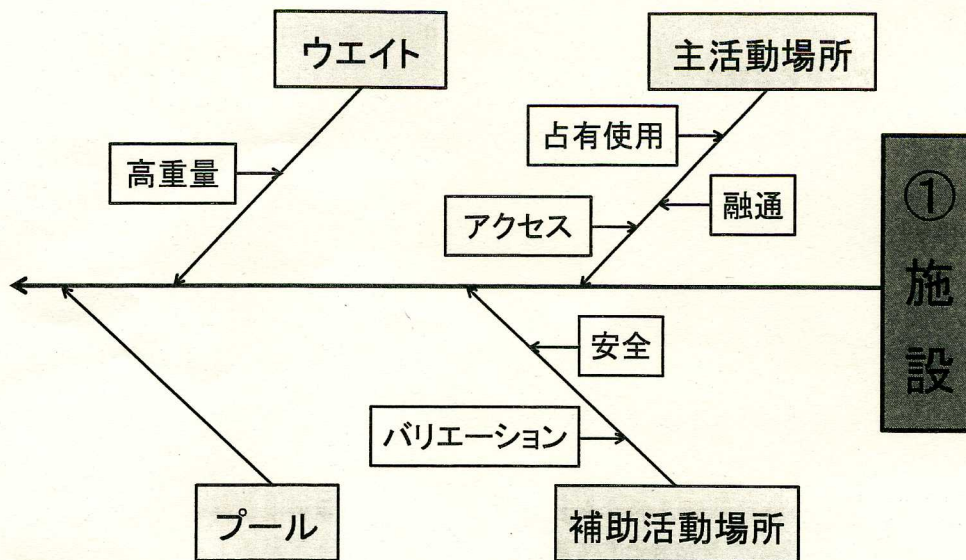


図2 「施設」の構成要因

それも北海道だけではなくて、本州の方からも結構な数のチームが集まったりしてるみたいなんですけど、そことスケジュールが結構かぶってしまうんですけど、4~5面あるスペースの内、私たちは必ず2面お借りできてます。

・「融通」

C氏：本州で合宿した時、「開館前に朝のシューティングで体育館を使いたい。」って言ったら、担当者が「有料になります。」って…。でも、(道内の合宿地では)体育館のそういうところも融通してくれる。

B氏：(合宿地を選定する時)施設がいいとか安いとかじゃない。それは安い方が、施設がいい方がいいに決まってるんだけど、そこでなんか事務的に、「何時

から何時まではOKですけど、それ以上はダメだめですよ。」みたいな形になるじゃん。そうじゃなくて、「じゃあ、なんとかしてみましよう。」っていう姿勢ね、たとえ施設が古くてもね…。

・「アクセス」

B氏：体育館と宿舎も近いし、宿舎から陸上のグラウンドも、芝生の普通に走るところも、体育館も本当にコンパクトにまとまっている。

3.2.2 「補助活動場所」

「補助活動場所」とは、その種目がメインで使用する施設以外の場所を指す。今回ヒアリングを行ったトップチームの合宿は殆どが「試合」を目的としたもので

はなく、選手個人やチーム単位での「フィジカル面の強化」を目的としたものであった。そこでクローズアップされるのが、「走り込み」や「ロードワーク」ができる施設や場所であり、そこで重要視される要因(小骨)として、「安全」と「バリエーション」が挙げられた。

・「安全」

A氏：ロードワークをさせたくて場所を考えて、最初は普通の道路を走らせようかと思ってたんですが、「車が対向で来るのが危ないから。」ってなって…。そしたら、泊まっているホテルの社長さんが、「廃線跡を利用したジョギングロードがあるよ！」って、「車やバイクは走らないから、安全だよ。」って…。

・「バリエーション」

A氏：合宿の半分は体育館を使いません。とにかく走らせたいんで…。宿舎の近くにある(神社の)階段が150段くらいあって、そこを往復させたりとか。あとは海辺の砂浜を走らせたりとか…。

B氏：僕が北海道で合宿をやる狙いは、芝を走らせたい、トレーニングのために。(中略)(道内の合宿地では)とにかく芝がいたるところにあるんでね、軽く100mは取れるし…。やっぱり陸上のタータンのトラックは硬くて危ないし、都会はなかなか芝のグラウンドがないよね。

3.2.3 「ウエイト」

「ウエイト」では一般住民が使用するのとは違い、「高重量」を求める声が聞かれた。

・「高重量」

E氏：ウエイト場は実際に体育館に併設されてるんで

すけども、あくまでも一般の方とか、最近であれば高齢者のリハビリ用の、どっちかいうと軽い、一般的なものですよね。ウチの選手らが使うとなると、「フリーウエイト」っていう、ごっついやつをなんぼでも付けてみたい…。

なんでちょっとその部分だけは、ある程度はこちらからも(バーベルやダンベルを)持ってくるようにはしていますね。

3.2.4 「プール」

「プール」は練習後のクーリングダウンや、故障者のトレーニングやリハビリのために、必要不可欠であることが判った。

E氏：プールは必要ですね。1番いいのは練習が終わったすぐ(入れるの)がいいんですけどね…。(中略)(道内の合宿地では)グラウンド近くの小学校の使わせていただいています。結構、無理なお願いやっただんですけど、行政の方が頑張ってくれて…。

B氏：あとは、プールがあるのがいい。リハビリの選手がいたらもう必要不可欠ね…。

3.3 「② サポート」について

合宿地選定要因の2つ目に挙げられるのが、「サポート」である。本研究のヒアリングの結果、「サポート」には中骨として示した「地域」や「行政」、あるいは「協会・連盟」による「合宿地 → チーム」への一般的なサポートと、チームによる「地域貢献活動」のような、「チーム → 合宿地」へのサポートも存在することが明らかとなった(図3)。

3.3.1 「地域」

「地域」という中骨を構成するものとして、「宿泊先」と「住民」、そして「メディカル」の3つの小骨が

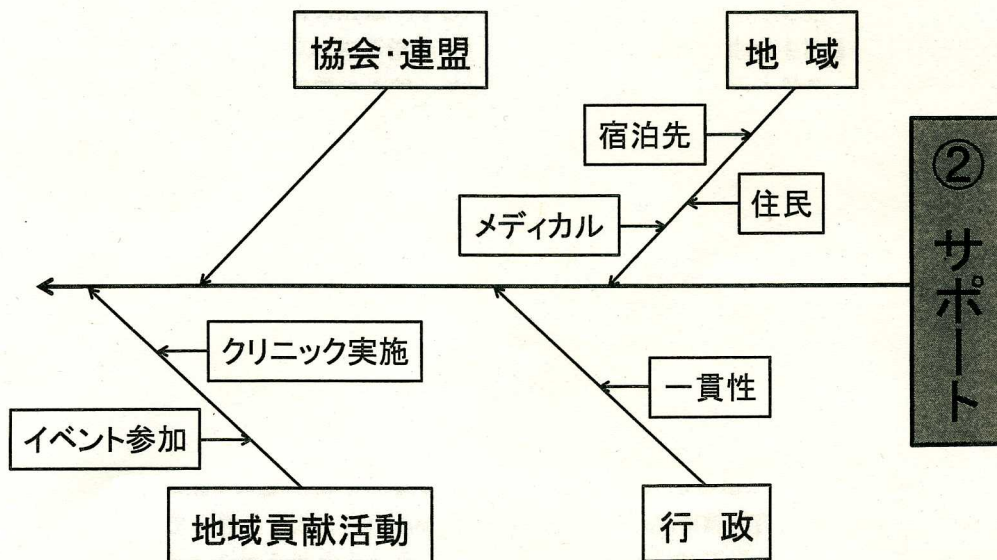


図3 「サポート」の構成要因

挙げられる。

・「宿泊先」

A氏：(ただ宿泊するというだけでなく)あの例えば、さっき言ったジョギングコースは、ホテルの社長さんが「ここあるよ。」みたいなのを教えてくれたり。あと、私たちの合宿の最後の最後、午前走り込みやって、お昼ご飯食べて移動だったんですよ。で、「北海道ってラーメンが美味しいんで、お昼にラーメンってできないですか?」って、ちょっと厨房に無理言ってお願ひしたら、ちゃんと出してくれて、選手は大喜び…。

・「住民」

F氏：あと地域住民の方も一生懸命応援してくださったりするので、だから昨年うちのチームが例年よりちょっと成績がよくて、上のクラスの試合に出場することができたんですけど、そこに地域住民の方も応援に来ていただきましたし、(中略)その決勝トーナメントは京都であるんですけど、合宿の時から「絶対京都行ってね!」って、「京都行ったら私、絶対に応援に行く。」って…。まあその方は女性だったんですけど、本当に京都まで応援に来てくれました…。私にとって(合宿地選定理由)の1番は人の繋がりかもしれないですね…。

・「メディカル」

E氏：合宿中、選手がケガをしても指定の病院へ行くと、それこそ急患扱いで先に診てもらったりとか、チームドクターと一緒に帯同している場合であれば、(診察室を提供するなどして)そのドクターに任してもらえとか…。だからそういうところは、えらく助かってますね…。

3.3.2 「行政」

「行政」には対応の「一貫性」が求められることが明らかとなった。対応の「一貫性」とは、

「チーム」に対するものと、「連盟・協会」に対する2通りのものが存在する。

・「一貫性」

B氏：行政って担当者が変わると全部「振り出し」に戻るワケよ。だから、その前の人はずごくやってくれたんだけど、お役人さんだからさ、担当者が代わると、その人の人柄が出たりして、難しいんだよね…。

D氏：市の担当者も同じスタンスでやってくれるから…。ホテルや施設が代わっても、(市の担当者が)こちらが前から要望してたことを先方に言うてくれるし、こっちがいちいち言わなくてもいいっていうのが、すごい楽ですよ。

3.3.3 「協会・連盟」

地元の「協会・連盟」は「地域」や「行政」と共働してチームをサポートすることが期待されており、合宿時のチームの依存度は極めて高い。

A氏：(地元の)協会の方に結構お手伝いしていただいて、その体育館に必要な用具や器具だったりとか、練習の時に使うデジタイマーとか、そういうのをほとんど貸していただいた…。(中略)あと、ロードワーク時のコース設定や、人手が欲しい時は、「ちょっと何名か欲しいです!」って言ったら、必ず何名か来てくれて…。今年はスタッフも本当に手薄だったんですよ…。

F氏：(地元の)連盟の方からすごく親切にしてくださるので。もう本当に私たちが合宿しやすい準備もすごくしていただいているので。あとはその連盟の方も一人ではなくて何名もいらっちゃって、例えばグラウンド整備や球拾いとかもやっていただいたりするので…。だから、そういった協力体制にありがたみを感じるから、それでちょっと(合宿することを)止められないって言ったらあれですけど、せっかくだったらすごく応援もしていただけるので、ここで(合宿を)やりたいという…。

3.3.4 「地域貢献活動」

前述したように、本研究における「地域貢献活動」とは、「チーム → 合宿地」へのサポートを指す。昨今、トップチームにはその種目の裾野を拡げるために、ジュニア層をターゲットとした「クリニック」や、本拠地やファン・サポーターとの連帯を高めるための「イベント」などが求められている。地域や行政、そして地元の協会・連盟からの手厚いサポートへの、いわば「恩返し」的な発想として、チームから合宿地への「地域貢献活動」が行われていることが明らかとなった。ただ、それらの対象としては、ジュニア層のみならず、地元の指導者も含まれていることも判った。地元の指導者は協会や連盟に籍を置くものが殆どであり、彼らの指導のスキルアップも期待できよう。

・「クリニック実施」

B氏：ホント、ここの先生方の熱意すごい…。で、クリニックやっても気持ちいいから、だから最初は予定してなかったクリニックなんか、頼まれれば「いいよ別に!」って、やっちゃうよね。(中略)ただ(合宿地として)利用するだけじゃなくて、地元との結びつきを作ることも大事。クリニックってさ、一回だけじゃ判らない訳じゃん。毎年積み重ねていくことによって、そこの地域の指導者や子どもたちのレベルが上がれば、こっちも判っていく訳だよね…。「じゃあ、もうちょっと教えてみっか。」ってね…。

・「イベント参加」

F氏：私たちは、すごく（合宿地の）協会にお世話になってるっていうこともあって、（合宿地の）町のお祭りとかも出ますね。（中略）登壇して（チーム名や選手を）紹介されますんで、お祭りを盛り上げる意味でも、こっちも盆踊りとかに参加させていただいて、一緒に踊ったりしますね。（中略）選手たちもリフレッシュするみたいです…。

3.4 「③ 気候」について

合宿地選定要因の3つ目に挙げられるのが、「気候」と「食事」である（図1）。

その中の「気候」においては、更に「冷涼」と「乾燥」の2つの中骨が示された。

・「冷涼」

B氏：それから、僕らどうしても大学の合宿だと8月とか、宿舎でもそうなんだけど、とにかく暑い、寝られない。で、日中、走って体力ないのに、夜も眠れないんで、「大学時代の合宿なんて思い出したくない！」ってのがよくあるけど…。やっぱりそういう点では、トレーニング効果をそのまま狙うんだったら、夜ちゃんと寝られなきゃだめだし…。

・「乾燥」

A氏：合宿したかったのは6月だし、やっぱり外を走る合宿なのに、雨が降られるとやっぱりどうしても基本的に外を走ったり、坂道走ったり、階段に行ったり、砂浜でトレーニングしたり、ってしたいのに目的が達成されないじゃないですか…。九州だと6月って梅雨にも入るし、時期的に暑過ぎて…。確かに、多分もうそれどころじゃないと思うんですよ。

なんで逆に6月だったら、「じゃあ北海道。梅雨もないし。」っていう理由でまず北海道に目を向けて、行きました。

3.5 「③ 食事」について

「食事」については、「雰囲気」と「道産食材」の2つの中骨が示された。

・「雰囲気」

A氏：でも食べるものに関しては北海道じゃないと食べられないものってすごく魅力的だと思うんですよ。今回、「私、ジンギスカンはムリ！」って言う選手がいたんですけど、宿舎の旅館が「かに本家」みたいな感じのところだったから、かに鍋とかが結構出てきたんですよ。で、なんだろ？ やっぱり雰囲気ですよ…。いつも食べられないものだから、やっぱり「疲れてても食べようかな。」って思うじゃないですか…。だから、バーベキューとかでも海鮮とかが出てく

ると、（雰囲気が変わり）いつもは肉なのに、「そっちもって食べようか。」と…、「お腹いっぱいになっても海鮮なら、もうちょっと食べれるかな？」とかって思ってしまうみたいです…。

・「道産食材」

D氏：「食材が新鮮」。そこが1番いいところだと思いますわ。それがまあ北海道の売りだと思えますけどね…。それこそ、この辺で言う「高原野菜」みたいなものがガンガン出てくるし、肉も魚も乳製品も…、ホンマ、何食べても美味しいですよ。

3.6 「④ 知名度」について

合宿地選定要因の4つ目に挙げられるのが、「知名度」である（図1）。「知名度」は「あこがれ」と「観光」の2つの小骨から構成されていた。

・「あこがれ」

F氏：やっぱり選手のモチベーションが北海道となると全然違うんですよ…。で、数年前にウチの会社の方もあんまり業績が良くなって、北海道だとやっぱりその交通費が掛かりますから…。でも、選手側から「やっぱり、あこがれの北海道に行きたい！」という意見がかなり出まして…。（中略）私たちが合宿しているグラウンドの近くに、すごい強烈な坂があるんですよ。それで、その坂が近くにある以上、その合宿には必ず「坂ダッシュ」が付いてくるんですよ。なので私、ちょっと選手に、「あの坂ダッシュ付いてくるけど、本当に北海道でいいの？」って聞いたんですけど、「それでも北海道がいい。」って言うんですよ…。

・「観光」

A氏：オフの日は、休むか、元気のある選手はちょっと観光気分、物産展的な、そのお土産屋のところに行ったりとか…。去年は近くの水族館とかに行ってきたね。地元の人に「どっか観光できるところないですか？」って聞いて…。でも合宿に来てる訳だから、コーチ的にはそんな体力は残しておいて欲しくない。「休みの日は休むくらいのもいいじゃないと。」っていうのもある…。ただ、まあリフレッシュするのも必要なんで、あまりそこまでは言わず、休む人は休むし、ちょっと元気ある人は、せっかく「観光地」でもある訳だし…、「リフレッシュに観光に行くのもいいよ。」って…。

4. 議論

本研究の結果から、北海道での「合宿地」としての選定・促進要因として、「施設」、「サポート」、「気候」、「食事」、「知名度」といった5つの要因が上げられるこ

とが明らかとなった。

その中で、最も重要度が高いものは「施設」であった。本研究の対象がトップチームであることを考慮すると、この結論は当然といえるであろう、しかし、対象の多くが、選手自身の「フィジカル面」の強化などを主目的としているため、体育館やグラウンドなどの「主活動場所」と同等、あるいはそれ以上に「補助活動場所」へのニーズが高いことが明らかとなった。安全性が高く、ある程度の距離を確保できるロードワーク環境や、芝生や砂浜、そして階段などのバリエーションに富んだ環境が求められている。また、高重量のウェイト施設や、クールダウンやリハビリに用いるプールなどへの要望も明らかとなった。

次に重要とされるものは「サポート」であった。「サポート」においては、「地域」や「行政」、そして「協会・連盟」からチームに向けての、いわば一般的なものの他に、チームがそれらに対して、「地域貢献活動」という形で行う「サポート」の重要性が明らかとなった。昨今のトップチームは前述したとおり、本拠地やファン・サポーターとの結びつきを重視し、それにより互いのロイヤルティを高めようとする傾向が強く見られ、その具体的な事例が「クリニック」や「教室」の開催や「イベント」の企画・運営、あるいは「地域活動」への参加などを挙げることができよう。「クリニック実施」のB氏の発言がそれを裏付けるものとなっている。お互いの「ギブ&テイク」が継続された結果、現在の道内合宿地の中には、10年以上にわたって同一チームの合宿誘致に成功したり、住民がそのチームのために、わざわざ道外まで足を運び応援をしたりと、「準本拠地」的なスタンスを確立した自治体があることも確認できた。また、「サポート」の中では触れなかったが、

D氏：行政の方と話してるんですけども、結局やっぱりみんな空港でお土産を買う訳ですよ。ただ、僕らがお金を落としたいんは空港ではなくて、合宿をさせてもらった街な訳ですよ…。ですんで、例えば、地元の野菜とか、海鮮とかの特産品を空港ではなく、その地元で買って、勿論、空港より安くですよ(笑)…。それで、宅急便なんかで家に送ってくれるんやったら、僕ら、幾らでもお金落として行きますよ…。そうすると経済的にも(合宿地に)還元できんじゃないのかなと…。

との声も聞かれて、経済的見地からの「地域貢献活動」への要望も示唆された。合宿誘致後の「経済波及効果」を高めるためにも議論が求められる点でもある。

それ以外では、「気候」や「食事」、そして「知名度」などの要因が、合宿地としての選定・促進に影響を及ぼすことも明らかとなった。これらは一般的な観光客が道内を訪れる際にも重要視する点でもあるが、ト

プチームにおいても同様であることが判った。

緒言でも示したが、道内で実施されているスポーツ合宿は年間2千件程である。ただし、その中でいわゆるトップチームが行う合宿は10%弱となっており、それ以外は、高校や大学、そして中学校が大勢を占める状況である。この点を踏まえると、本研究で示された要因は、前述した押見らの研究結果とは異なる部分も多く見られた。これらは、本研究があくまでもトップチームに特化したためであり、学生や生徒たちを対象とした合宿には必ずしも合致する要因とは限らないことを示しており、この点は本研究の限界でもある。これからは、押見らの手法を用いてのトップチーム分析も求められよう。今後の課題としたい。

しかし、今回のヒアリングを基にして作成された特性要因図は、これからの道内自治体、あるいは本州における、新たなスポーツ合宿誘致の一助になるものと考えられる。

付記：本研究は、2014年度笹川スポーツ研究助成(公益法人笹川スポーツ財団)を受けて実施したものです。ここに関係者各位への感謝の意を表します。ありがとうございました。

引用参考文献

- 北海道環境生活局スポーツグループ(2016):平成26年度市町村におけるスポーツ合宿の実態調査結果,
<http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/bns/sports/gasshuku/gasshukukensaku.htm>
- 石川 馨(1956)品質管理入門, QCテキスト・シリーズ1, 日科技連出版社。
- 石澤伸弘, 横山茜理(2014)道内におけるスポーツ合宿の現状調査, 北海道体育学会第54回大会プログラム・予稿集, p29.
- 押見大地, 原田宗彦, 佐藤晋太郎, 石井十郎(2012)スポーツチームの合宿地選考における意思決定プロセスの検討:高校・大学スポーツチームに着目して, スポーツ産業学研究, Vol22, No1 pp9-27.
- 田邊勝彦(2010)スポーツを通じたまちおこし, 佐賀大学経済論集, Vol43, No4 pp1-16.
- 丹埜 倫(2014)地域の未利用インフラを活かす「合宿ビジネス」, サービス革新, 第5号, pp34-39.
- 横山茜理, 石澤伸弘(2015)バスケットボール競技のスポーツ合宿地としての可能性—北海道における事例比較—, 北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要, 第6号, pp37-42.

平成28年10月13日受付
平成28年12月19日受理